

春期特別集会（伊豆高原浮山荘）

一如

――ヨハネ伝 8、15 章ほか――

1975年3月23日（伊豆高原）

小池辰雄

われは往く 般若心経 物心一如 維摩の一黙 無という場 聖霊における自由無碍 人生は
即ち使命なり 縦の一如 我は真の葡萄の樹 自然霊然 わが愛に居れ

●われは往く

私はこっちに来る前にヨハネ伝を通読してきたけれども、もうヨハネ伝には全く圧倒されます。やはり、これは新約聖書の最高峰でしょうね――最高峰というのは、その高さとか何とかいうのではない――大変なものです。もし、新約聖書の中でどれか一つを選べと言われたら、ヨハネ伝かと思います。旧約の中ではイザヤ書です。

では、ヨハネ伝8章を開いてください。21節から、

「²¹斯てまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、

恐ろしい言葉です。

わが往くところに汝ら来ること能わず』

これは大変なことです。

²²ユダヤ人ら言う『わが往く処に汝ら来ること能わず』と云えるは、自殺せんとてか』

こういう馬鹿げたことをこのユダヤ人たちは言う。

²³イエス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我はこの世より出でず。²⁴之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。

もう禪の問答みたいなわけです。

汝等もし我の夫なるを信ぜずば、

即ち、天から降^{くだ}つてきたこと――「我のそれなるを」というのは「我の我なるを」「エゴ・エイミ」ということ――それをまこととして受けないならば、

罪のうちに死ぬべし』（ヨハネ8・21、24）

「我は往く」というのは、キリストにとっては「我は帰る」というのと同じことなんです。



往くも帰るも同じこと。私たちも往くことが、父の御許に、キリストの御許に帰ることです。だから、この「往く」ということは帰入すること、「南無阿弥陀仏」の「南無」にあたる。私はこの南無という字が大好きだ。「南無キリスト」という。キリストに帰入するんです。帰り往く。ダンテの『神曲』の中にも、「我ら往く」という力強い言葉が出てくるところがあります。

キリストの自然は、天に昇ることがキリストにとつて自然なんです。水は下につくのが自然です。これを「法」という。「水は去りゆく」と書く。水は下に去りゆくことが、これが自然なんだ。だから、法というのは自然という意味なんです。本当の法哲学をやるといい。日本人は本当にフィロゾフィーレン（哲学）することを若い人はもつとしくはないかん。本当の哲学は、いわゆる神学ではないけれども、天哲に、天の哲学に帰するんです。神学なんていわなくて、天哲学という。本当の神学、哲学は天哲に帰する。宗教哲学なんていう言葉もありますけれども。我々が天界に行くことが自然になるようになる。

ユダヤ人はダメですよ、キリストに反しているから。「ユダヤ人」とキリストが言っているのは、キリストを受けとらない連中に向かって、キリストは言つてらつしやる。だから、こんな訳のわからないことを彼らは言っている。この問答をみていると本当におもしろいです、次元が違うものだから。

●般若心経

今日は少しこういうものを引用してお話しましょう。

「観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄 舍利子
色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識亦復如是」

般若心経の始めの方です。

「観自在菩薩は深般若波羅蜜多を行ずる時、五蘊はみな空と照見し、一切の苦厄を度す。舍利子よ、色は空に異ならず、空は色に異ならず。色即是空なり。空即是色なり。」

「舍利子」というのは「シャーリプトラ」というインド語です。般若心経の始めの方ですが、ヨハネ伝17章と非常に相通するものがその中にあります。もちろん、ヨハネ伝の方が般若心経よりかもうひとつ上です。

「観自在菩薩」というのは観世音菩薩のことで、観世音というのは世音を観ること。世音というのは世の人々の声、またそのいろいろな心の状態、それを世音という。観るといのは、見るではない。見というのは見えるということ、観というのは洞察することです。観入すること。自在に世音を観ることのできる菩薩、悟りをひらいた人です。「深般若」というのは――「深」というのはなほだ深いという意味ですから、深々微妙と注してありますけれども、深々微妙なところの――「般若」というのは本当は「パンニャー」という梵



語の「智慧」という字だそうですが、深い智慧ですね、「神の智慧」という言葉もありますが――極めて深く玄妙なところの智慧の「波羅蜜」「パラミータ」――「パラミータ」というのは彼岸に到着するという意味です。此岸^しというのはこの世の世界、この娑婆の世界のこと。彼岸というのは極楽の世界。即ち、悟りの妙境がこの「パラミータ」です。

その悟りの妙境、彼岸に到る道を行ずるとき、それを実践するとき、五蘊^{ごうん}はみな空と照見して――「五蘊」というのは五つの事象です。色、受、想、行、識。「色」というのは物質界です。形象、形を持ったところの物質界がこの「色」という、現象界です。今の言葉でいうと、「受」は感情のこと。「想」は知覚のこと。「行」は意志のこと。そして「識」は根源意識、深層の意識の世界です。これを仏教で、「心処心央」というんだそうですが、「心処」は心の在るところ、「心央」は心の中心で、王座をしめているところ。即ち要するに、この四つは魂の、心の、心魂の意識の世界です。唯心の世界。「色」は唯物物の世界。だから、これを「五蘊^{ごうん}」というんです。

即ち、物質界と精神界。形而下と形而上の事象。これをみな空と照見し――正しく見る。仏教の言葉には素晴らしい言葉があるね。我々が御霊の光でものを見ることが正に照見なんです――五蘊をみな照見して一切の苦厄を度す。「度す」というのは突き抜けて度^たしてしまうこと。一切の地上の苦しみ災いを渡^{わた}ってしまう。これをみんな空と見照^{みさう}してしまう。そういうものを突き抜けて超越^こしてしまうわけです。だから、空と見照^{みさう}することが大事なんです。

「舍利子」「シャーリプトラ」というのはお釈迦さんのお弟子さんですけども、アシバジツトという弟子にこのシャーリプトラがある時でつくわして、「仏教は一体何だ」と聞く。このシャーリプトラというのは本当はバラモン教だったんです。バラモン教であつたんだが、アシバジツトという弟子にでつくわして、お釈迦さんの法のことを聞いたときに、このアシバジツトが、

「一切の諸法は因縁より生ずる」

と答えた。そのことを聞いて、その問答によつて、シャーリプトラはバラモン教から仏教に転換した。ちょうどユダヤ教からキリスト教に転換したパウロみたいだ。このシャーリプトラというのは智慧第一の人だそうですが。パウロも非常に明かな弟子でしたから。

●物心一如

そういうようなわけで、観世音菩薩が言うのに、シャーリプトラよ、色は空に異ならず。別に空と違ったことはない。色即是空であり、空即是色であると言った。私は仏教におけるこういうたちのものの把握の仕方に非常に大事なものがあると思つてます。

福音の世界にみると、特にヨハネ伝はそのことにおいて――またパウロもちろんそれをつかんでいますから、あとでちよつと引用しますが――物質界と心が、即ち物心



一如、なんです。我々でいうと、私たちの身体と心、心身一如。あるいは、霊と体とが一如。霊体一如ということがアナログア（類推）をもって言うことができる。物はもちろん始めは差別していいですよ。けれども、差別相にとどまっているうちは真理の世界に入れない。一休和尚がある山伏にでつくわして、その山伏が一休和尚に尋ねた。そもそも仏教は一体何だと。

「仏法何処にありや」

と聞いた。そうしたら、和尚さんが即座に、

「胸三寸にあり」

と言った。あの達磨と慧可との話と似たような消息です。

「それでは、その胸三寸に仏法があるなら見せてもらう」

と言って、山伏は短刀を引き抜いて、一休和尚を刺そうとした。一休和尚の胸をえぐって、そこに仏法があると言うから、

「さらば拝見いたしましたよう」

と。ところがどっこい、一休は答えてこう言った。

「年ごとに咲くや吉野の桜花木を割りて見よ花のありかを」

と。毎年毎年、吉野の桜花は咲く。

私もかつて吉野山に全山万木これ花と、本当に満開の吉野に行つて——今でも私は目に浮かびますよ。それ以来行つたことがないし、またそんな素晴らしい桜を見たことがない——もうあの吉野から出るのが嫌になつてしまった。桜の霞の中に完全に入ってしまったてね、何といいますが、あの中千本、奥千本か。

木を割つて花はどこにあるか、木の中にお前は花があると思うかと。けれども、木の中に花はないのだが、花が咲く。冬の枯れ枝を見て、そこに花がないけれども、どっこい花が咲いてくる。即ち、花という「色」、現象界——花という色、姿形をもつた事態——それは実は、そのもとをたずねると、木の中に花が別にあるわけではない。そこから出てきて花になったわけではない。全然木の中には花がない。即ち、この本体界のつかむことができないものと、現象界とが即しているんだと。

今ちょうど花が咲いてますよ、紅梅が。この木の中に花があるわけではなくて——それはまあ自然科学的に言えば何ということはないけれども——現象においてその奥を見る。私は、花を見て太陽を見る人は本当に花を見ていると言います。即ち、陽の光があそこに結晶しているんです。この紅梅に太陽の光が結晶して、こういう姿と色と香りをしている。

これは太陽の光。太陽の光は無色透明。無色なる光が即ち空なるものが、花という色に現象している。「空即是色」というんです。だから、「色即是空」という。即ち、この花において太陽の光を見る人は、本当の花の本質を見ているということですよ。そういうように、本体と現象が即している。霊肉渾然としている。これは唯物論でも唯心論でもない。それ



はただ分けて人間が理解するだけのはなしで、本当の世界はみな一如の世界である。「ガンツハイト」「全一性」であるということです。

ゲーテみたいなのは「全人」「デア・ガンツェ・メンシュ」という。全人というと、何か完全無欠の人と思うけれども、そうじゃない。分裂のない「一」なんです。全一の一。分裂のない一如のすがた、これを「全一」「全人」という。どんなに特殊な現れ方をしてもかまわない。その特殊において、ある全きものがある。

あなた方一人ひとり、一人が即集会である。ダンテの『神曲』に

「ダンテという男は一人一教会である」

と出てくる。この一という、ダンテという一人が即ち、一つのエクレシアをなしているようなやつだと。そういう一人ひとりです。一において全体の姿がちゃんとそこに凝集して投影している。いわゆる数量的に、一がたくさん集まって全体になっているのではない。どこまでも質の問題なんです。質的な人間にならなくてはいいかん。量は問題でない。

一休和尚なんていうものは完全にその世界に入っている。ゲーテはマクロコスモス自身に投影しているミクロコスモスみたいな人間だというのは、これが全人的な在り方なんです。投影している。イエス・キリストは宇宙人です。宇宙人であり、かつまた超宇宙人なんです。スーパーマンなんて言ったってダメなんだ。キリストはもつと凄い。

そういう、つかみどころがない、もの凄い、千変万化してしかも一なるもの。それは如何にして可能か。それが今日のお話なんです。まだ可能までいかない。

それがこの「色即是空、空即是色」ということ。即ち、冬の枯れ枝を見て、そこに微笑むところの花の姿を見る人は本当にその枯れ枝を、冬の枝を見ている人だ。そういう人になつてください。私はあまり幻を見ない男だけれども、そういう幻はスッと見るわけです。時には見ますよ、幻も。正夢というやつをね。明け方の夢にはよく示されることがある。

●維摩の一黙

今度は、文殊と維摩の問答の話がある。維摩が文殊に聞いて言うのに、

「不二の法門は何ぞや」

と。二つなき法門は何ぞや、二つなき福音とはなんぞやと。

「いや、パウロはこう言った、ペテロはこう言った、ヨハネはこう言った、ヤコブはこう言った」

と、それを比較研究してどうだなんて神学者はやっている。そんな研究の仕方では、ひとつも不二の法門が分からない。超神学者にならなければ、本当の神学は出てこない。

「まことの神学は神学をあざ笑う」

と、私の「無教会神学論」に書いてある。

「不二の法門は何ぞや」



と聞いたら、

「不二の法門というのはあまりにもの凄い内容で、とても言葉で説明し尽くせない」

と。説明することができない。どうにもならんと。何ぞやと言ったって、これはしようがない。説明しようとするればするほどズレてしまう。真理とは何ぞやと聞かれたら、

「真理とはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ」

と、こういうように答えれば一番いい。そこに盛られている一切のキリスト、そこに盛りきれないでいるところの一切のもの。

「イエス・キリストの言ったこと、したことは、とうてい盛りきれません」

と書いてある。真理とは何ぞやと聞いたら、四福音書なりと答える。もうその他に言いようがない。

「どうにもならん。言葉を超越したものだ」

と、こう答えた。今度は、文殊が、

「それではお前に聞くけれども、一体その不二の法門は何だ」

と言ったら、維摩は黙り込んでしまつて、何も言わん。「默然たり」と書いてある。「言えない」とも言わない。黙っている。

「維摩の一黙その声雷の如し」

という。この表現がおもしろいね。默然としているその維摩の一黙、黙り込んでいるその姿とところが、その沈黙の奥にあるところのその声は雷の如しという。こういうのを読むと本当に愉快だね。

豁然^{かつぜん}として福音が分かりましたか、こういうのを聞いて。福音は正にそういうものです。そこらでお説教しているようなものではない。教会に行つてたら、だんだん魂がおかしくなつてしまう。教会の悪口を言つて申し訳ないですが。無教会もそうだな。「研究、研究。聖書の研究会」だなんて。内村先生はしようがないな、「研究会」だなんて。どうも私はだいぶこの頃、口が悪くなつてきた。

「維摩の一黙その声雷の如し」というのは、私はこれを読んで、忘れられない。

「沈黙は金にして雄弁は銀なり」

というが、沈黙というのは、分からないで沈黙しているのではない。表現しきれないから黙り込んでしまう。だから、一番いい答案は白紙で出す。とても表現できません。そうしたら、120点やる（笑）、それだけ分かつていればだよ。プラスもマイナスも両極端は一致する。全然分からない白紙と、分かりすぎてしまつてどうにもならん、表現できないという白紙と。

「絶言絶慮、表現の彼方なり」

なんて書いて、それくらいの勉強をする学生がいたら、私はもちろん超一番にしてしまうけれどもね。福音はそういうものです。



おもしろい俗謡がある。

「恋に焦がれて鳴く蟬よりも鳴かぬ螢が身を焦がす」

恋に焦がれて鳴く蟬よりも――セミは鳴くのはオスかな、それでメスと呼んでいるわけだ――鳴かぬホタルの方が自分の身を焦がしていると。おもしろいことを言うね。そういうのが本当の世界なんです。

「鳥と虫は鳴くけれども、この日蓮は泣かぬども涙絶えせず」

とか、日蓮は法華経に対する感応の涙が流れてしょうがないという。その涙は外に流れない。内側に流れる。はらわたの中に流れていく。涙なき涙という。

しかし、本当の涙を涙する人はまた本当に歓喜を与える人です。キリストがそういう人です。思いやることの最も深いキリストは最も驚くべき歓喜を与える。「ミットライデン」という言葉があるが、「共に悩む」というのは、悩みを共にしながらその人を救い上げてしまふのがキリストの悩みなんだ。痛みばかりではない。痛みを共にしながら、砕けてしまつて、相手を突破させるんです。

●無という場

般若心経を読んでも、こういった現象界と本体界が一如の世界です。それは如何にして可能であるか。悟つたような顔してはダメだよ、まだ。仏教の悟りも結構だが、私はもうひとつ絶対次元からこれを見ていく。これを照見するんです。そうすると、その場は、「空」と言うよりも、私は「無」と言いたい。それを照見するところの、空即是色の世界を本当につかむことのできる事態は、この無という場なんです。照見するものは我にあらず。自分から完全に脱しているところの事態、もはや我もなく世もなくというような、その無の事態です。これはキリストの中に祈り入ることによって、この無がくる。自分で無となろうとするのではない。あるがままでいいですよ、皆さん。あるがまま、ダメなまんまで、私なんか。そのダメなまんまで、キリストの中に、キリストの門を通つて、十字架というキリスト門を通つて祈り入ると、自分がはずれる。

「己を憎む」なんて言つたつて、もうはずれてしまう。憎む己さえなくなつてしまう。今度は、もう憎むなんていう意識もいらない。イエスさまはそう仰つたけれども、もうひとつその意識も乗り越えてしまう。憎むの憎まないの、好きの好きでないのなんていうことではない。そういうようなところを抜けてしまう。私は祈りの世界でそこへ入ると、時々バツと、座っている自分が浮き上がってしまったりする。祈入してしまうわけだ。これはもうしようがないです、この世界に入ったら。影も形もないんだから。

私はこうやってあるけれども、相対的人間小池はここに立っているけれども、本当はいないんだ。いないやつがしゃべっている。幽霊かと思つたら、手もある足もある（笑）。そういう、自分がすっかり抜けてしまうと、今度は、聖霊が照見する。御霊が、光そのもの



が観てくれるんだ。光観するとでも言おうかな。光が観る。光そのものが観る。私が観るのではない。そこにくると、この

「色即是空、空即是色」

なんていうものも楽につかめてくる。ただ悟って、悟り澄ますのではなくて、それを本当に靈然の世界に変質変貌させていく。創造力です。

今の文明がなぜダメかというところ、そういった靈的な法則によって動いていないからです。人間の小賢しい知恵で動いているから、今の文明文化は自然を損なう。そして、人間はとうとう自分の知恵と欲望と力とでもって滅びていく。これは「色」に、現象界にこだわっているからです。

しかしながら、「受想行識」が本ものになるためには、聖霊が来なければ、これは本ものにならない。いくら唯心論なんて、心なんて言ったってダメなんだ、その心は。心が心となるためには一遍、心が死ななければならぬ。脱心しなくてはいかん。「心身脱落」というのがそのことです。仏教の方では、悟りでその世界に行くのでありますけれども、福音の世界はそこははっきりしているんです。

だから、そういった文明はダメなんです。そして、これを本当に一つにして、しかも靈然の世界に、靈的必然の世界に入れてしまう。自然靈然と私は言いますが、この自然靈然ということなんです。この色の世界を本当の自然に、今度は五蘊の中の四蘊の世界を靈然に変えてしまう。この五蘊を自然靈然にしてしまう。もう、ここにくると、最高の真理です。本当は高も何もない。

「その高さ、長さ、広さ、深さのいかばかりなるかを」

とパウロが言った、あの事態です。

●聖霊における自由無碍

コリント後書6章8節を開くと、

「8…我らは人を惑わす者の如くなれども真、人に知られぬ者の如くなれども人に知られ、死なんとする者の如くなれども、視よ、生ける者、懲さる者の如くなれども殺されず、¹⁰憂うる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。」

とある。無一物無尽蔵、自由自在である。在れども無きが如く、無けれども在るが如しと。ああ、楽しいよ。パウロのこういう言葉はどういうところから出てきたかというところ、聖霊における本当の自由無碍の世界からです。さっきの自在の菩薩の世界です。

私の福音から仏教に変わった人がある。惜しいね。仏教だていいよと私は言っている。しかし、本当につかみなさい。そうしたら、またこつちへ帰ってくるよと。我々の福音は



一流の仏教をみんな包摂してしまうんだから。

「まあ、小池なんていう野郎は大言壮語ばかりしている」

なんて思われるかもしれない。どう思われてもいい。

しかし、本当にそうなんです。だから、こんな般若心経なんか読んだって楽しい。分かっ
てしまうから。また、それ以上の世界に入ってしまうから。決してとらわれない。一切を
包摂してしまう。イエス・キリストは宇宙的な最高の霊ですから、くだらない分け隔てな
んかしない。ちょうど大地みたいなものだ。何でもよろしい。全部吞んでしまう。そして
みんなこれを変化させて、植物や動物なんかを全部生かしてしまう。大地や大海は何でも
受けとってしまう。この御霊の世界に入ると、大地大海の如き人物になってくる。つまら
ない分け隔てはいらん。「ああ、結構です」と。それが本当の一如の世界に持つていく御霊
の力なんです。一如というのは、私はただ体裁で言っているのではない。本当に一如なん
ですから。どんなものが来ても、それをみんな変化させてしまう驚くべき作用を持っている。
ということは、相手をただ呑み込んでしまつて、相手の特質をなくしてしまうということ
ではないですよ。それぞれの特質は最もよく生かしながら、全部を包摂してしまう。いわ
ゆる典型的に人間を変えてしまうことではない。

よく、偉い先生がいると、その先生の真似ばかりするのがある。藤井先生が「真実」
と言うと、みんな

「真実、真実」

と言い出してみたりね。嫌だよ、あんなかつぐのは。皆さん一人びとりは天下一品だと言
っているとおります。それぞれ天下一品で、そして大調和をなしていく。もうかなわん
ですよ、人間の実存の大交響樂には、天界の大交響樂には。

兼好法師がこういうことを言ってる。

「されば、一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、いづれかまきるとよく思ひ
くらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨てて、一事をはげむべし。一日の
中、一時の中にも、あまたのこと来らんかに、少しも益のまさん事を営みて、その
外をばうち捨てて、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと心に執り持ちては、一事
も成るべからず。……一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るをもいたむべからず。
人の嘲りをも恥づべからず。万事にかへずしては、一の大事成るべからず。」（『徒然草』
第百八十八段）

と。これは兼好法師の『徒然草』の第百八十八段に書いてある言葉です。

●人生は即ち使命なり

3月26日はどういう日か知っているかな。ベートーベンが天界に往った日です。彼が亡
くなる時に雷鳴が轟いてきたそうだ。彼はこぶしを挙げて、その雷鳴の方に向かって凝集



して天界に魂があまかった。ベートーベンらしい最後だな。このベートーベンの記念碑の除幕式のときにグリルパルツァーという詩人が吐いた有名な言葉がある。

「ただ一つのことを追い求め、ただ一つのことのために心を用いながら、ただ一つのことのために耐え忍びながら、一切のものをこの一つのために打ち捨てながら、この男は突き進んで行った。」

と。「ただ一つのこと」とはベートーベンにとっては音楽であります。

我々は一生の課題を持っている。人生は即ち使命なり。どなたでも使命を持って存在しています。人の奥さんになろうがどうであろうが。歴史は女性がつくるという。外側に現象しない。現象しないものは、女の人は、色即是空の空の方かもしれない。そういう見えな存在が実は世界をつくっていると書いてもいいわけです。

「女人まず成仏する」

と日蓮上人はいいました。女が穢らわしいなんて冗談じゃない。男は勝手なことを言う。

とにかく、皆さん一人びとりは、存在は使命がある。神さまの歴史をつくるのに、どの一人もそれがないと神の都の石垣はくずれてしまう。そういう大事なひとつひとつの石、宝石であります。それだけの自信をもって行きなさいよ、本当だから。与えられたる自信だもの。たとえば寢床に蒲鉾みたいに釘付けにされてしまっても、ガンにかかっても、なおいよいよもって使命がある。その人の祈りは健康者の祈りよりかきつと凄いだろう。本当に命懸けの祈りだ。それだけの魂の、全存在の生命力をもって、霊的な生命力をもって生きなかつたら、福音を受けたってつまらんですよ。福音の気の抜けたのはこの世のものにも負けてしまう。キリストが言っているとおりに、これは一番どうにもならん。

「塩が味を失なわばこれを捨ててしまう。その枝が果を結ばなかつたら捨てて

しまう」

とキリストが言われた。

何も心配はいらんですよ。どうぞ、それだけの迫力をもって生きてください。人にどう思われようが、一人びとりは神さまの目には掛け替えのない存在としてあります。それは、無即無限無量という質をいただくんです。無限無量という量をいただくのではない。私が無限無量と言っているのは、この質の問題ですよ。この有限の中に量的に無限のものはありっこない。しかしながら、無限無量なる質はくるんです。

「父の全きが如く全かれ」

というこの完全性がちゃんとくるんです、御霊がくれば。いつか言いましたね、

「私は三日月だ。けれども、私は満月がちゃんと約束されている三日月である」

と。そういう無限無量な、イエス・キリストの聖霊は一人びとりにその人らしい顕れ方をしてくださる。



●縦の一如

「我と父とは一つなり。我は父に居り、父は我に居る」

という。これはヨハネ伝にさんざん出てくる。この「一つ」ということが10章、14章、15章あたりに繰り返し波動的に出てきます。

「こんなに私は父と一緒にいるのに、お前たちはまだわからんかね」

とキリストが言っておられる。「父を見せろ」だの何だのかんだのとくだらないことを言うから。

そういう、一如です。キリストは父と一如になっている。そのキリストの中に私たちは入るから、この縦の一如ができる。まず縦の一如です。縦の一如が本当の平安の世界です。「シャローム」という本来の言葉がこれなんです。人とのただの挨拶ではない。何をやっていても、本来のこのシャロームの事態が、この一如の事態が本当の平安です。そして今度は、これが貫いて横に動いていく。これはキリストが、

「神を愛することと隣人を愛することは一つだ」

と言われたのもそのことです。

「神に愛されている、キリストに愛されている」

ということは、

「私たちは救われている」

ということですよ、愛されているとは。本当に愛しているだろうかなんて。恋人同士ではない。キリストにかくも救われたことが、この神さまの、キリストの私たちに対する愛ではないですか。これが恩恵ですから。そして、これが横にずーっと流れていく。これが人に平和をもたらす。

「幸いなるかな、平和ならしむる者」

とは、

「お前がまず平安でなければ、平和ならしむることができないぞ」

と。キリストはあそこで注釈をつけないけれども、そういうわけです。どっちも「シャローム」という言葉だけでも。

これが今度は、横に誰とでも一如になれる。これが本当のエクレシアです。原始福音であらうと、無教会であらうと、カトリックであらうと、仏教徒であらうと、私は一如になれる。こちらが一如になる力を持っているんです。人の品定めはいらない。そこまで突き抜けなかったら、このキリストの福音ではないぞ。

世界はイデオロギーでは絶対に平和はきません。それぞれのイデオロギーにはそれぞれの真理があります。けれども、必ず限界がある。そんなイデオロギーでもって世界を一つにしよう——政治の世界もいつもそうでしょ——あんなことをやっているから、いつまでもガタガタしている。ソ連であらうと中国であらうとどこだっていいよ。



「このイデオロギーを受けとれ」
ではない。

「イデオロギーはそれぞれ結構でございます。ただし、限界があるから、自分たちはみんな気をつけなさいよ」

と言いたい。それを絶対化するからおかしなことになる。問題はもつと絶対の世界がある。それが本当の人間性ということです。これは神性が宿らなければ、本当の人間性にならないんだ。

そうすると今度は、教会の牧師さんは、神性ばかりやって人間性がなくなるような、変てこな化け物みたいなものができるけれどもね（笑）。それもまた困る。キリストがなぜ人となったか。それは天界にいたキリストが地上にくだってきて、神人となつてくださった。キリストは全き人らしき人であった。最も人らしき人である。いわゆる宗教臭くない。

本当の宗教の世界は宗教臭くない。無色透明なんだ。無色透明の水の如し。だから、これは無限の味を持っているから、キリストはこれを葡萄酒にも変えた。あれは甘酒にもできる。甘酒にもなればお汁粉にもなる（笑）。あなた方、葡萄酒にしか変わらないと思つたらダメですよ。こういう話がある。お母さんがお味噌汁をつくりそこなつた。そしたら、その子どもは非常に単純な信仰で、

「神さま、このお味噌汁を甘くしてください」

と祈ったら、本当に甘くなつてしまつて、お母さんはびっくりしてしまつた。これは本当の話ですよ。そういう世界です。

「おきな幼児のごとくならずば、天国には入れない」

とキリストが言われた。本当の人間、人間性ということが大事です。ゲーテが最後に言いました。

「ドイツ人は今から百何十年かあとでどうなるだろうか。もし、哲学の化け物みたいなやつになつたら困るぞ。ドイツ人は本当に人間であつてほしい」

と。なぜ、ゲーテがああいう偉大な詩人であるかという、あらゆるイズムを突き抜けて本当の超主義の世界に入っている。だから、私は無教会主義なんていうのは嫌いなんだ。無教会主義なんて凝り固まるからパリサイになる。

どこの人種であろうとも人間であることに変わりがない。その人間性の一番深いところは何かという、愛であります。

「愛は一切に勝つ」

という。一切に勝つとは、

「愛は一切を救い上げる」

ということですよ。愛は一切を救い上げる。お釈迦さんの世界も慈悲であります。孔子も仁と言いました。キリストは愛と言われた。これみな共通なるものを持っている。人間が一



番ほしいものは愛なんです。愛のないところに生命はない。生命の質は何か。これ愛である。この愛は本当にキリストを通してきている愛であります。この神の愛が、キリストの愛が本当に私たちを縦に一如にすると同時に、これを横に一如として、

「これ一つとならんがためなり」

ときつき読んだ17章のところの御言の祈りがみなこれに凝集している。私は17章はいちいち解釈しなくなつて、横からこうやってつかんでしまった。

もう私はいちいち逐語的に解釈するのが面倒くさくてしようがない。そういうのをやりたいのは、まだ若い人はやってくださいよ。しようがないよ、小池調というのはこういうのだから。これを

「何々調になおしてください」

なんて言ったつてしょうがないんだ。小池は小池らしくあるよりかしようがない。もつとも、日曜日の集会では少しは詳しくやりますけれどもね。この特別集会というのはやはり特別な在り方になってしまふ。

●我は真の葡萄の樹

今は愛のことを言ったから、今度はちよつと15章を読みましょう。これは「葡萄の樹」の譬えです。ここは何といつても素晴らしいところです。

「我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。おおよそ我にありて果を結ばぬ

枝は、父これを除き、

「我に本当に在れば」必ず果を結びます。

「我にありて果を結ぶということを知らないものは」

ということです、文法的に言えばね。「果を結ぶ」というのは本当に

「キリストの証者となる」

ことです。

果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。

「いよいよ神のものとす」

ということ。神性をいよいよおびさせる。「潔める」という言葉を使うと、つい汚れたものと別つような気持ちになる。私は「聖別」という言葉はあまり好きではない。相対的な私たちが他の人から聖別されるというのは、私はとてもそういう気持ちには耐えられない。私は罪びとと一つになって、それと一緒にキリストの中に入っていくということしか私には意識ができない。私はダメな野郎だから、いわゆる潔めの信仰とはどうしても一つにならない。

「もつと、豊かなキリストの光の生命の世界に、愛の中に入れられて、さあ、一緒に行きましょう。相対的な潔い・潔くない、義しい・義しくない、なんて別つの



はよしでしょう」

ということです。別つようなことをするとパリサイになるから。

それで、いよいよ神のものとしてくださる。もちろん、この「聖」「ハイリツヒカイト」「カードーシュ」という言葉は大事な字ですよ。滅びの世界は、神からはずれていることがもちろん聖と反対の世界ですから。その意味において私は否定するのでは決してありません。

「潔めたもう」

とは、

「神のものはつきりとさせてくださる」

ということです。キリストのものとなる、神のものとなるということが、この「潔め別つ」というなら、そういうことです。「パリサイ」という言葉が「自らを別つ」という言葉だから、それでヘタするとパリサイになつてしまう。

³ 汝らは既に潔し、わが語りたる言に囚りてなり。

これは非常に断定的な言葉ですね。「私の語った言によりて」とキリストが言われるときに、「私の語った言はもうお前たちの中にくいついている」

と、実力の裏付けをもつてキリストはつきりと仰るわけです。だから、「わが語りたる言に囚りてなり」と言う。

⁴ 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。

「居る」というのは、「とどまる」という「メネイン」という字ですが、キリストの中に居るということ。「中にいる」ことがこの「居れ、とどまれ、宿れ」という――「くつついている」なんてこの頃の口語訳聖書には訳してあるね――とにかく、その中に入ってしまうことです。「宿る」という言葉が私は好きなんだ。昨日の晩もここにお宿した。キリストの懷の中に宿る。

枝もし樹に居らずば、

樹に宿っていないならば、樹と連なっていないならば、

自ら果を結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。⁵ 我は葡萄の樹、

なんじらは枝なり。

もう連なっているんだと。

人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、

何事も為し能わず。

ただし、「我に居れば何でもできる」という、逆の肯定の言葉をその奥に読まなくては。

キリストの中にいるということを人間的に意識しようとする、辛くなる。これが無的実存なんです。「我」という意識もないんです、「居る」という世界は。わかりますか。「自分が」という意識をしていると、

「さて、私は本当に居るだろうか？」



なんて思う。キリストの中に自分をぶちまけて——いやもう十字架されてしまっている——すると、もう相対的意識の世界を乗り越えてしまいますから。超意識の中に入ってしまう。

●自然靈然

「汝、右の手のすることを左の手に知らせるな」

という、あの実存です。マタイ伝25章が私は大好きなんだ。31節から。水を与えた。

「いつ、あなたに水をあげましたかね」

「この小さき者にやったのは私にくれたのだ」

と。こういう自然の世界、無意識の世界です。超道徳の世界なんです。超道徳で道徳の世界を、律法の世界を完全に満たしている世界です。律法を満たそうとして意識しているのではなく、もう自然になっっている。たまたまそういう人がいるね、生まれつき本当に良質の人が。いいことをしないではいられなくて、そのいいことをしていることも意識してない。これは本当に神の子ですよ。そういうようにキリストの中に自分が——自分なんてものは意識しない。「なんだこんな野郎は」というわけで、それを意識しないで——本当に入られてしまっているわけです。そうすると、自分の頑張りがないから、人と相対的に争うことがなくなる。相対的に争うことがなくなるから、神的な角度から本当に相手を救うようなことになってくる。助けることに、力を与えることになってくる。どう誤解されようが、どう取り扱われようが、「ああ、結構でございます」と。もう天下無敵です。まあ、無教会の方々はお気の毒だよな。

「自分の信仰によってのみ義とされる」

されるなんていう命題を一生懸命でやっている。マルチン・ルターはあんなことをあまり言い過ぎた。そういう自然の——私は靈然、という言葉が好きだ——自然靈然の事態になる。自然靈然の事態になったときに、自然靈然の中に入ったときに一如なんです。これが本当の靈法の世界です、法というならば。

一如、ということが、私たちにとつては、そうでなければ力がないということになるんです。くだらない品定めはいらなくなってしまう。相対的な判断が乗り越えられて、非常に簡単になってしまう。ということは、もちろん日常の生活においていろいろの、緻密にやらなくてはならないことはもちろんそこからいくらでもできるので、「何でもかんでもボケちゃえ」なんて言うのではない（笑）。一如というのはボケる世界ではない。

一如というのは、一如からは無限無量の光が発して、非常に微細なところまで認識することもできるし、動くことも働くこともできる。分析されたものが総合して一如になるのではない。まず一如という世界に乗り込むと、そういう多種多様性がでてくる。天才というのはこういう角度をちよつと持っている。ベートーベンがあんな素晴らしいいろんな音楽の形式を出すでしょ。非常に繊細なものがあるかとおもえば、もの凄い重厚なものや、



千差万別です。ゲーテやダンテの文学にしてもそうです。そういうような具合にいく。我々は天才でないから、そんなたくさんのことはできないにしても、この一如から我々に与えられること、それが本当の意味において現象してくるわけです。分析・総合ではない。一如から無限無量の展開が始まる。これは質的に言っているんですよ。

●わが愛に居れ

そして、

「⁷汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随^{したが}いて求めよ、然らば成らん。⁸なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。

と。「居れ、居れ」と言つて、キリストと一つになって、これが本当のエクレシアだよと。

⁹父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。」（ヨハネ 15・7〜9）

という9節は非常に大事な言葉です。ときどき、書いてくれと人に言われると、私はよくこの句を書く。キリスト即愛なんです。キリストの愛です。愛のキリスト。キリストは即ち愛。愛の実体はイエス・キリストです。一人びとりをのっぴきならない内容をもって愛していただく。顧みてくださっている。どんなに不公平のようにみえても、そうじゃない。公平だの不公平だのという現象界は、それは「色」にとらわれている。一番奥の世界に入ると、最も素晴らしいことが、その人に一番素晴らしいことが、その人でなければならないことが展開を始める。

撫子^{なでこ}は撫子らしく、菊は菊らしく、バラはバラらしく、神さまはつくっておられる。菊をバラに変えてやろうかなんてちつとも思わない。ナスはナス、キュウリはキュウリ、メロンはメロン。私はキュウリだが、メロンになりたいなんて言つたつて、そういう比較研究はひとつもいらん。キュウリならキュウリらしい味を出せばいいんだ。いい加減なメロンよりかキュウリの方がおいしいよ（笑）。何でもその十全の姿が一番貴い。この頃、この文明は間違っていますよ。年がら年中、イチゴが食べられてみたりね。ちつとも季節のものでないから、本当の味がしないですよ。人間はその季節その季節にその旬^{しゅん}のものを食べるようにできている。そして、そのときに一番味覚があっている。それを不自然なことをやるから、これがみんな文明は人間をこわしている。心の上でも身体の上でもこわしている。ああいうものはもう買わないようにしましょうね（笑）。5月だったらサヤエンドウを食べればいい。タケノコを食べればいい。それなのにカンヅメのものなんかを食べたりね。まあ、そのへんにおきましよう。おしまい。

